

# 史遊会通信

No. 181  
平成21年11月14日行  
発

事務局  
03-3712 0651  
下山田方

例会のお知らせ

十月講演要旨

## 王陵の谷の謎

### —大阪河内科長陵の謎—

隆 恵

大阪府南河内郡太子町には、聖德太子を祭る觀福寺や六世紀から七世紀に在位した敏達・用明・推古・孝德の四人の大王の陵墓がある。地元では、エジプトの王家の谷になぞって王陵の谷と称している。

この土地は、大阪府と奈良県の県境である金剛山・葛城山系の大坂湾を見下す丘陵地であり、飛鳥時代から河内南部と大和を結ぶ陸路の大路であった「竹内街道」の脇にある。この丘陵地を大阪湾に向かって下り切る平野部には、応神天皇陵等の大型前方後円墳が集積する「古市古墳群」があり、更に大阪湾方向に向かうと、わが国最大の仁徳天皇陵を初めとした「百舌鳥古墳群」がある。飛鳥時代以前の大王陵の所在地は、

大和国の奈良盆地、そして河内国の既述の二か所に集中しており、例外として河内国の科長と摂津国の三島の雜体大王の陵墓がある。最近蘇我氏の真相解明が行われているが、その謎は未だに数多くある。

今回は、蘇我氏の大王の陵墓がなぜ都をおいた飛鳥ではなく、この河内の科長に集中しているのかの謎解きをしてみた。

その推理の前提として、先ずその前提となる独断の仮説を紹介する。

○仮説第一章

蘇我氏は応神王朝（河内王朝）を開いた葛城氏の支族であった。  
ほぼ五世紀の支配者であつた応神大王や仁徳大王や雄略大王たちは、葛城氏が起

◎ 11月例会

日時 平成21年11月25日（水）  
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 三戸岡道夫氏  
テーマ「新しい資本主義の形態」  
(ソーシャルビジネス)  
自由執筆は会員・友の会員による  
「今年感動した三冊の本」  
締切り11月30日 19字75行前後

◎ 12月忘年会

日時 平成21年12月2日（水）  
午後6時～8時

会場 学士会館  
会費 七千円

出欠の返事は同封のはがきにて  
11月25日必着でお願いします  
自由執筆は鯨・松川・太田の諸氏  
締切り12月31日

した王権であった。葛城氏は、元々は奈良盆地の西南部（葛城市や御所市）を地盤としていたが、ほぼ四世紀の崇神王朝（三輪王朝）の時代に、時の先進国の朝鮮半島との人事交流・交易により、その勢力は奈良盆地の西北部を経て河内南部から更に中心地の難波まで勢力圏を拡大し、応神王朝を確立する。そして、それまで河内・摂津及び奈良盆地の北部を領地として栄えていた物部氏を次第に圧倒するようになる。

しかし、この応神王朝も英雄とされる雄略大王が崩御するや、その後繼争いから約三十年間は絶対的大王がない混乱時期となる。そこで六世紀初頭に越国・三国から応神大王の五世の孫、繼体大王が即位する。この繼体の治世は約二十五年続き、その後、繼体が尾張氏の娘との間に設けた安閑・宣化の兄弟（庶子）が即位するが、この二人の大王の統治期間は約五年で終了して、その後は繼体が応神大王の末裔の姫との間に設けた欽明（嫡子）が即位する。

欽明大王の都の「シキシマ」宮とは、定説の大和國「磯城」島ではなく、河内國の「志紀」島である。その根拠の一つは、書記の欽明の崩御の記録に「天皇は大殿にて崩御、河内古市でもがりをし、新羅の使節

がこのもがりに参列した」とある。

また、早世した石姫皇后の陵墓が現在の科長の敏達陵であるのも、欽明がこの河内國を根拠地としたと推定する理由である。

欽明陵は、宮内庁指定の飛鳥の檜隈陵陵墓かまた見瀬丸山古墳説にせよ、そもそも最初の埋葬地は河内古市にある筈で、「応神天皇陵」ではないかと推測している。そして、蘇我蝦夷の時代に飛鳥に改葬されたと推測している。

蘇我氏の歴史上の登場は、この欽明誕生の直前の宣化の大王としての蘇我稻目である。この稻目の大臣の在職は四十年に及び、この稻目の娘たちと欽明との間の王子たちが用明天王・崇峻大王・推古女王であり、有名な聖德太子は孫に当たる。この稻目の権勢は大王の欽明を凌ぐものであった。

#### ○仮説第二章

この欽明は応神王朝を興した葛城氏の一族であり、先祖の王権を篡奪した繼体一族から王権を取り返したのである。そして欽明を担いだのが蘇我稻目であり、彼の出自は葛城氏の分家筋の一支部であった。あるいは欽明葛城家の執事職であったかもしれない。蘇我氏の先祖を百濟國もしくは伽耶國の王族の流れとする説も多いが、現時点

での私見は不明としておきたい。

#### ○仮説第三章

蘇我氏の元々の本拠地は大和の飛鳥ではなく河内の石川であった。河内の石川から興隆した蘇我氏は、泉大津等の大坂湾の沿岸部また河内の北部の大和川流域周辺から大阪湾に面する難波に至る要所を直轄地とする。河内科長の土地は、蘇我氏の本拠地の一隅にある領地であり、大阪湾を望む風光明美な土地で、蘇我氏の聖地であった。

#### ○仮説第四章

最大の実力者の蘇我馬子の主要の活躍舞台は難波であった。中国には数百年ぶりに強大な統一国家の隋が勃興して、朝鮮半島の軍事的緊迫が倍加する一方、馬子の時代に難波と言う最高立地の港湾を物部氏から奪取する事に成功し、河内と大和の中間地の斑鳩に聖德太子を配置して、政治と経済の中心地を難波と斑鳩とする一方、飛鳥に配置した推古女王は祭祀を扱う巫女的な存在とした。

▽河内科長に埋葬されている大王たちの謎解き

(1) 蘇我氏系の大王の謎解き

①用明天王

一旦は飛鳥に埋葬するも、推古元年にこの地に改葬を命じたのは、間違いなく馬子であろう。馬子は、蘇我氏の栄光の象徴である初の用明の陵墓を、蘇我氏ゆかりの科長に決定したのである。用明は敏達に次ぐ二番目の埋葬者である。

### ②聖德太子

大伯父且つ義父の馬子は、娘婿の聖德太子が共に内外の多難且つ画期的な政治を行つた同士であり、大王に即位出来なかつたが、この聖なる地に埋葬したのである。史上三番目の埋葬者である。

### ③推古女王

推古は、三十六年間在位と言う長期王権を全うして崩御する。本人の希望で飛鳥辺にある早世した竹田皇子の墓に合葬される。ところが後世に親子ともども河内科長に改葬される。この改葬を命じた首謀者は持統か藤原不比等であろう。記録が真実であれば、推古は舒明天皇誕生の恩人の筈である。しかし彼らにとつては、恩人とは言え所詮推古は忌むべき蘇我氏の一族であり、自分たちの聖地とする飛鳥から放逐したと言うのが真相なのではないか。河内科長陵は、蘇我氏にとつては聖地であつても、反蘇我氏宗家の立場を貫く不比

等にとつては、唾棄すべき蘇我氏の大王たちの墓場と考えたのかも知れない。

### 〔〕非蘇我氏系の大王の謎解き

#### ①敏達大王

河内科長陵の最初の埋葬大王で、用明の改葬の二年前に改葬されるとある。改葬を命じたのは、用明と同じく馬子であろう。なぜ馬子が非蘇我氏系の敏達の改葬を命じたのであろうか。

敏達が姪の推古の夫であつたと言う單純なものがなかつた筈である。

その理由は、欽明と敏達は蘇我氏の本家筋（主筋か）の葛城氏出身であり、この科

長山田の土地も元はと言えば葛城氏の領地であった。そこで葛城氏の故地であるこの地に埋葬したのではないか。欽明・敏達親子二代の大王は、古市周辺の志紀島を都とした大王だった筈である。

敏達の母で欽明天皇の石姫の墓が、この地に元々あつたとの記録の謎解きにもなる。

### 〔〕蘇我氏系の崇峻が埋葬されなかつた謎解き

余談だが、舒明天智親子の皇統の正当性は、敏達の子孫と言うただ一点にあるのだが、敏達の功績の称賛もせず、飛鳥を都とした大王としながら、燐國の河内科長陵への改葬を平然と記録するなど、この皇統記録は創作のように感じられる。

その論拠は、舒明天皇には十か月と言ふ異常の長期間を要し、舒明天皇崩御後の皇極皇后の即位は円滑に行つたとしつつ、舒明天皇の葬儀は一年二ヶ月後と言う異常さの記録である。

#### ②孝德大王

断言はしないが、舒明天皇が敏達の孫との記録は真つ赤な嘘で、天智は敏達や欽明の血などは一切継いでいない王族のかも知れない。極論になるが、一貫して親百濟政策を行つた舒明天智・天智親子は、百濟の王族だった可能性も一概に否定できない。

### 〔〕孝德大王

孝德は、天智が元々繋ぎの大王として一時的に担いだ人物に過ぎず、崩御一年前に終始都とした難波に捨て置かれた大王でもあり、今更聖地の飛鳥に引き取る気もなく、忌むべき墓地と見做した河内科長の一角に埋葬しただけなのである。

### 〔〕蘇我氏系の崇峻が埋葬されなかつた謎解き

崇峻は、蘇我氏の血統を継ぐ二番目の大王で、大和倉梯（桜井市）に宮を置き、なぜか大伴種手連の娘を正妃とする。馬子の娘も妃としていたようである。

馬子の暗殺を企むが、馬子に先手を打たれて殺される。崩御の当日に大和倉梯岡に

埋葬される。殯宮も造営されず、誅の記録もなく、事の経緯から密葬されてそのまま打ち捨てられたのであろう。

実兄の穴穂部が馬子に殺された後に、推古と馬子の推挙で即位し、僅か五年間の在位の故もあるが、大した治世の記録もなく、全てが創作に見える内容である。馬子の暴虐の一例として創作された大王のような気がする。この五年間は推古女王即位まで空位だったのかも。

目白台周辺は江戸期には「山の手」の辺境だった。同じ山手線の沿線で神田、日本橋、京橋などの江戸期に造成された「下町」(第一次)の町人地にたいして、武蔵野台地の東縁の武家地を「山の手」(第一次)と称した。関東大震災後、世田谷、中野、杉並を中心に地域的に第二次「山の手」が形成され、高度成長期には多摩の武蔵野台地に第三次「山の手」が形成された。

私は第二次「山の手」の中野の新井薬師の参道沿いで生まれ、戦災の焼け跡を見ながら小学校に通つた。その後、成人するまで杉並の荻窪で育つたが、近くの田んぼが住宅公団の団地に変貌したことには驚いた。

○「景観観察学」実習  
目白の日本女子大学に在職中、授業の合間、昼食後の腹熱しにその周辺を散策した。その当時、路上の看板、消火栓やマンホールのフタなど、さらに川の上流から流れ来た漂流物を収集し、街の隠された表情を生き生きと把握する「路上観察学」が流行した。私はそのような個々の「物件」では

なく、目の前に繰り広げられた「都市空間」で、その周囲を観察し、隠された歴史と生き生きした生活を解読することに興味が湧いた。自ら「景観観察学」と名付け、その実習を試みた。

目白台周辺は江戸期には「山の手」の辺境だった。同じ山手線の沿線で神田、日本橋、京橋などの江戸期に造成された「下町」(第一次)の町人地にたいして、武蔵野台地の東縁の武家地を「山の手」(第一次)と称した。関東大震災後、世田谷、中野、杉並を中心に地域的に第二次「山の手」が形成され、高度成長期には多摩の武蔵野台地に第三次「山の手」が形成された。

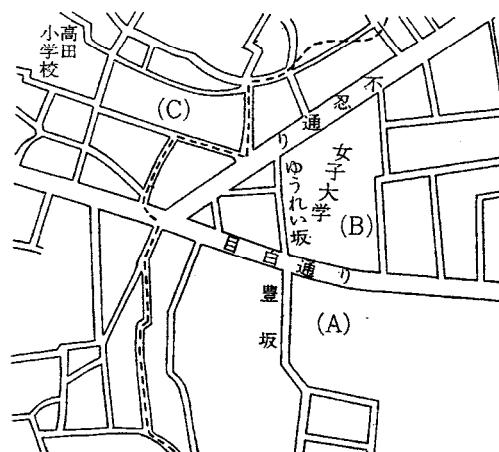
私は第二次「山の手」の中野の新井薬師の参道沿いで生まれ、戦災の焼け跡を見ながら小学校に通つた。その後、成人するまで杉並の荻窪で育つたが、近くの田んぼが住宅公団の団地に変貌したことには驚いた。

○「目白の由来」  
「絵図」では神田川の江戸川橋を始点に音羽町から西へ目白坂を登ると、五色不動の一つ、「目白不動 別当新長谷寺」が描かれている。この寺院は靈験あらたかで、しかも境内からは神田川の水を取り水する大洗堰を見下ろし、対岸の早稲田の村落や高田の森林を眺望でき、風光明媚だったことから、多くの参拝客で賑つた。ところが、この寺院は戦災によつて焼失し、今は廃寺となり、「目白不動」は近くの金乗院に移された。

目白坂を登ると、目白通である。「絵図」を見ると、この通りに亀松と鶴松の巨木が描かれている。今やその二本の巨木はない

○「自由執筆」  
「目白の女子大学」周辺を  
読む (一)  
山本 鎮雄

○「景観観察学」実習  
目白の日本女子大学に在職中、授業の合間、昼食後の腹熱しにその周辺を散策した。その当時、路上の看板、消火栓やマンホールのフタなど、さらに川の上流から流れ来た漂流物を収集し、街の隠された表情を生き生きと把握する「路上観察学」が流行した。私はそのような個々の「物件」では



日本女子大学周辺の概念図

が、道路沿いに消防署があつて、「老松消防署」という看板がかけられていた。目白通は江戸期に目白台の「尾根系」の自然道が整備され「雑司ヶ谷」方面に延び、現在は練馬JCから関越自動車道と大泉JCから東京外環自動車道に乗り入れることが出来る。現在の目白台二丁目の交差点がT字路で、そこを起点にして不忍通が東北方面に延び、護国寺を経由して上野・不忍池に至る。とまれ、「目白」という地名は歴史的には江戸住民の信仰行楽地の目白不動・目白坂、目白通に由来する。JR山手線の「目白」駅

はその由来から名称されたのであろう。

○三地域のイメージ

ところで、日本女子大学周辺を街歩きし、町並み、道路の状態、敷地の規模などに注目すると、A、B、Cの地域がそれぞれ異なることが分かり、ますます「景観観察学」実習に励んだ（概念図参照。――は文京区と豊島区の境界）。これら三つの地域の相違は江戸後期に刊行された「雑司ヶ谷音羽絵図」を見ると、自ら明らかである。

目白通に沿って南側のAの地域には椿山莊、和敬塾、目白運動場、旧田中角栄邸、豊明小学校があり、いずれも敷地の規模は広大である。「絵図」を見ると、黒田豈前守、細川越中守、小笠原信濃守、稻垣摶津守、大岡主膳正などの諸大名が拝領した広大な下屋敷と抱屋敷である。江戸城下の大名屋敷は明暦三年の大火で被害を受け、諸大名は江戸城下の上屋敷にたいして、郊外に大火の際の避難屋敷として、また夏期の避暑用の別荘として広大な下屋敷を設けた。Aの地域の下屋敷は江戸市中を眺望することができ可能な最適な傾斜地である。

目白通の北側で不忍通に囲まれたBの地域は、「絵図」を見ると、その大部分は武

家屋敷と徳川将軍の先陣を勤める御先手弓組と鉄砲組の与力衆・同心方（中・下級武士）の組屋敷である。与力衆は幕府から短冊型の三百坪の土地を拝領し、庭付き一戸建の独立した住宅を自前で普請し、庭で自給用の野菜を栽培した。

池波正太郎の『鬼平犯科帳』では「先妻の子」の長谷川平蔵は父の死後、目白の御先手組（弓組と鉄砲組）の組頭を繼いだ。平蔵の邸宅はこのB地域の組屋敷の何処かという設定である。火付盗賊改方の長官に就任した平蔵は、嗣子を組屋敷に残し、妻とともに江戸城下の清水門外の役宅に転居した。

このBの地域の武家屋敷や組屋敷は、今では細分化され、住宅も密集し、アパート、商店、駐車場などが混在しているが、それでもなお独立性の強い、緑の多い閑静な住宅地である。目白通と不忍通に面した日本女子大の敷地は武家屋敷と新潟の新発田藩主の溝口又十郎の下屋敷だった。明治維新後、明治政府から買い上げた財閥の三井家が、日本女子大学校の校地に寄贈した。

（つづく）

自由執筆

紹興というところと魯迅

中込 勝則

今年の六月に中国江南地方を旅行しました。揚子下流域は江南と呼ばれ水に恵まれ物産豊富で川や運河が多いことから水運が発達し、古くから栄えた都市が多く、なかでも紹興は豊富な米から造る紹興酒で知られる他、長い歴史の中で汲めども尽きない味わいをもつ街です。北京・西安・上海などは日本人がよく訪れていますが紹興はルートを外れていますのであまりご存じないかも知れません。今回はこの紹興について述べます。浙江省紹興市は、上海の南西に位置し、人口四三五万人。水郷地帯の中心にあり、市内は川や小さな運河がはり廻らされ、落ちついた雰囲気を持つた街で、豊かな物産に恵まれ、古くから人が住みつき四千年の歴史があると言われています。

紹興は、太古の昔「会稽」と呼ばれました。夏王朝を創業した禹がこの地で諸侯を集めて会同し、諸侯の功績を計つたことにちなんで「会稽」の名前がつけられたとい

紀元前五百年ごろの春秋時代には、紹興には越の都がおかされました。すこし北方の蘇州には呉が都をおいていました。両国は関係は犬猿の仲で、「臥薪嘗胆」の故事で史上有名な「呉越の戦い」があつたのもこの地においてでした。この因縁の戦は紀元前四九六年、呉王闔閭が、越に出兵したことから始まります。呉は返り討ちにあつて大敗したあげく、闔閭は傷を負い、それがもとで死んでしまいます。父の後をついで呉の王となつた夫差は、父の仇を討つために、名臣呉子胥などを用いて、日夜軍備を整え兵を磨きました。その間、父の仇を忘れないために、薪の上に寝たといいます。これをつたえいた越王勾践は、攻撃こそ最大の防禦だとばかり、呉を攻めましたところが復讐に燃えた呉の敵ではなくかえつて敗れてしまい、越に逃げかえつて都ちかくの会稽山にこもりました。進退窮ました勾践は降伏し、呉に臣従することとなり、呉に対して財宝や美女を献上してご機嫌をとりむすびました。ですが心の中ではあります。

復讐を誓って、いつも苦い肝を手許から離さず常住坐臥それを嘗めては気持ちを引きしめていました。

呉王夫差が「臥薪」して国力を整えた期間は三年間ほどですが、越王勾践の「嘗胆」の忍従は二十二年の長期におよんだといいます。

この間、呉王の夫差は越を臣従させたことで驕りたかぶつて、越王勾践から贈られた天下の美女西施を溺愛し、かつて薪の上に寝てまでして越への復讐を誓つたことにどすつかり忘れて遊びほうけるようになりました。西施は、元々は会稽山あたりで薪をとつていた娘でした。その美貌が目にとまつて呉に献上されることとなつたわけですが、范蠡は呉に送り込む前にさまざまな教育を彼女に施しました。教養や身だしなみ・化粧・その他は勿論、王に気に入られる為の色々な手練手管などです。男は女に對して、ただ顔が美しいだけでは最初は可愛がつても、いずれ見飽きてしまつてそれだけでは長続きしません。そんな時にものをいうのは閨房のテクニックです。西施は男を喜ばせる性のあらゆる技を三年にもわたつてたっぷりと仕込まれて、夫差の後宮

に送りこまれました。夫差が彼女を得て、欣喜雀躍したのは勿論です。一方、越王勾践は長い忍従の間、名臣范蠡や文種などを用いて国力を養い武を練つて、遂に紀元前四七三年、満を持して呉に攻めこみました。國力を消耗して衰えつた呉はひとたまりもなく越に敗れました。夫差は、かつて呉子胥の諫言に従わなかつたことを泉下の彼にわびつつ、自ら命を絶ちました。

やがて戦国の世になると越も長江中流の強団楚に吸収されました。項羽が出たあの楚です。項羽も劉邦に敗れ、英雄達の興亡もはるか昔のこととなりました。

さらに時代は下つて、東晋の時代の永和九年（三五三）三月三日、大書家の王羲之が蘭亭において一族ほか四二人を集めて、「曲水の宴」を催したのは、紹興南西の蘭渚山の麓の蘭亭鎮においてでした。觴が曲水を流れ下つて自分の前に来るまでに詩を作ることが出来なければ罰杯を飲まねばならぬという遊びです。この罰杯を飲んだ人は十五人だったといいます。こうして各人が作った詩集に王羲之序文を書いたのが「蘭亭序」で書道の手本とされています。蘭亭は今は立派な史跡公園に整備され、曲

水の流れも再現されており、観光客が繁く訪れる所となっています。

紹興付近の豊かな経済力はこの地の人々に学問をする余裕を与え、歴史上有名な人物が輩出しています。清代末の革命家にして女流詩人の秋瑾、文豪魯迅（本名周樹人）とその弟の周作人、共産中国の総理であった周恩来などです。その他歴代科挙の合格者が圧倒的に多いのもこの地方です。魯迅と周恩来とは先祖を辿れば同じ家系となります。紹興市内には魯迅の生家が保存され、その隣には立派な魯迅紀念館があつて、彼の業績や遺品などが展示されています。魯迅が若い時、丁度日露戦争のころ仙台の医学専門学校（現在の東北大学医学部）で学んだことは、存じでしょう。その時いつも彼のことを気遣い、講義を筆記することもたどたどしかつた彼のノートをいつも朱筆で添削し文法的な誤りまで直してくれた恩師藤野厳九郎先生のことは、彼の自伝的小説「藤野先生」や太宰治の「惜別」に詳しく書かれていますし、現在は学校の教科書にも載せられています。

やがて彼が医学の道を捨てて、文学で故国中國の民衆を啓蒙しようとしていったこと

とはご存知の通りですが、その転機となつたのは「幻灯事件」という事件でした。当時幻灯は珍しく、講義上の必要から設置されていましたが、講義の合間にそこでニュースを見ているときでした。日露戦争で日本軍が勝つてゐる場面など人気でしたが、ある中国人がスパイ容疑で日本軍によつて処刑されるシーンが映りました。その場に中国人もたくさんおり、中国人たちは同胞が銃殺されるのをぼんやり見ており、あまつさえ「万歳」を叫んだのです。魯迅はこれを見てショックを受け、この蒙昧な中国人とその国を救うには医学ではなくて文学による啓蒙しかないと思うようになりました。そして一年半で退学し中国に帰つました。そして一年半で退学し中国に帰つて革命と文学の道に進んだのです。彼が仙台を去るとき藤野先生は自分の写真の裏に「惜別」と書いて彼にあたえました。

魯迅紀念館を見るととき、この街が生んだ偉人がまだ無名の頃日本の仙台で受けた人の心の温かさをこの街の人たちは決して忘れてはいけないことがよくわかります。紀念館内には藤野先生と魯迅とが並ぶ像が飾られ、館の入口には先生の胸像が建ち、二人の交流を永遠に偲ぶよすがとなつています。

自由執筆

### 茶禅一味

三戸岡道夫

千利休は茶道界の大聖人であり、また、わび茶を通して「わび・さび」という日本の幽玄美の創造者でもある。

しかしそれは千利休の表の姿であつて、本当の姿ではない。その本質は大政治家であつたと思われる。

豊臣政権がスタートすると、千利休は秀吉の茶道頭となつた。そして秀吉は、武は秀吉、文は利休と運営の分担をはかつた。当時、文の代表は茶道であった。しかし秀吉には文の素質も素養もないでの、武は自分が行い、文は利休に任せたのである。しかし武といつても、戦乱の世は徐々に治つてきており、世を治めるのは「武」ではなく、「徳」（仁の精神）でなくてはならない時代になつてきていた。しかし悲しいことに、秀吉にはまったくそのことがわかつていないのであつた。

秀吉が天下を取つてからやつた」といえれば、太閤検地を行つて年貢をきびしく取

り立てて、黄金を大坂に集め、その金で大坂城、伏見城を作り、聚楽第を作り、黄金の茶室を作つて絢爛な茶会を催し、また淀君をはじめとする、天子のブランド美女を大勢集めて側室にするなど、豪華な権勢を誇示することであつた。

そこには徳の政治の姿はなかつた。仁の精神の一かけらもない。利休は、

（これでは、せつかく天下を取つても本当の政治ではない。こんな政治をしていたら、豊臣政権は長くは続かないであろう。この豊臣政権の姿勢を直さなくてはならない）

しかし利休は茶道頭として秀吉に仕えているのである。文の分野を任せられている利休が、武（政治）の分野に直接口を出すわけにはいかなかつた。利休に出来ることは、

利休はこの無私のお点前によつて、秀吉に仁の精神を悟らせようとした。そのため利休はわざと「わび茶」の道を進んだのである。金の茶室を誇る絢爛の茶道からは、仁の精神は生れてこない。一切の虚飾を捨てた簡素のわび茶のお点前こそ、仁の精神を悟るのにふさわしい茶道である。

しかし秀吉はついにその利休の深い政治的意図を理解することができず、豊臣政権は一代で滅亡した。利休こそ茶道という衣をまとつた大政治家、あるいは軍師であつたのではないか。

その仁は無私の精神から出でくる。

禅の修業で一番重要なものは、道元禅師が教えるごとく、座禅である。ひたすら座禅をせよ。座禅とは、我を無くして、ひたすら祈ることである。無私の境地に入ることである。その無私の境地から、他人に対するやさしさ、いたわりの心、仁の精神が生れる。仏の慈悲の心である。

茶道においてこの座禅に当るものが、お茶をたてること、すなわちお点前である。

茶人はお釜の前に座り、お茶をたてる」とのみに専念する。お点前の無我の境地、そこに座禅と同じ仁の精神の源がある。

利休はこの無私のお点前によつて、秀吉に仁の精神を悟らせようとした。そのため利休はわざと「わび茶」の道を進んだのである。金の茶室を誇る絢爛の茶道からは、仁の精神は生れてこない。一切の虚飾を捨てた簡素のわび茶のお点前こそ、仁の精神を悟るのにふさわしい茶道である。

しかし秀吉はついにその利休の深い政治的意図を理解することができず、豊臣政権は一代で滅亡した。利休こそ茶道という衣をまとつた大政治家、あるいは軍師であつたのではないか。